説教余滴 2019 年 12 月 15 日『神の痛みの神学』

日本のキリスト教界は、ローマ教皇の来日に涌きました。長崎・広島そして東京。
マスメディアは何を期待したのでしょうか。反戦・反核・反格差のメッセージを打ちだし、平和を愛する教皇、分け隔てなく庶民の中にいようとする教皇、というイメージは受け入れられました。日本カトリックと教皇庁の努力の賜物です。ご同慶の至り、と申し上げましょう。

多くの関連記事を阿部先生が切り抜いて週報ボックスに入れてくださいました。ありがたく感謝申し上げます。一つだけご紹介しましょう。磯村健太郎氏の署名記事。
“フランシスコは 15 年に発表した文書で「神は責任を感じています。私達の幸せを望み、私たちが幸福で、喜びと平和に満たされているのを見たいのです」と記している。・・・
命を与えた人間が痛ましい状態になっていることに、神自身が痛みを感じている――。それが彼の行動を支える根拠という。・・・神はいわば断腸の思いでいるというのだ。“
このフランシスコの行動の根拠が「あわれみ」で、神自身が痛みを感じていることです。
ギリシャ語の「スプランクニゾマイ」で、はらわたが打ち震えるといった意味です。“

これを読み、思い出したのは北森嘉蔵先生の『神の痛みの神学』です。1946 年に初版が出版されました。現在は、講談社学術文庫に収められています。問題が指摘されますが、多くの言語に翻訳されてきました。
神の痛みの神学の聖書箇所はエレミヤ書 31:20。「主いひたまふエフライムは我愛するところの子悦ぶところの子ならずや我彼にむかひてかたるごとに彼を念はざるを得ず是をもて我腸（はらわた）かれの爲に痛む我必ず彼を恤（あはれ）むべし」（文語訳聖書）。

北森先生は、「腸（はらわた）かれの爲に痛む」に注目し、ここに神の痛みがあるとします。教皇も読まれたのでしょうか。